

# 野上弥生子の問題意識試論-『真知子』と『若い息子』を中心に-

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学日本文学研究会<br>公開日: 2011-04-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 陳, 淑梅<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/10144">http://hdl.handle.net/10291/10144</a>                             |

## 野上弥生子の問題意識試論

——『真知子』と『若い息子』を中心に——

野上弥生子は、明治、大正、昭和の三つの時代、百年に近い長い人生を送った作家であり、日本文壇だけではなく、世界文壇でも最高齢現役作家だった。一九〇七年（明治40年）夏目漱石の推薦によって、初めて「ホトトギス」に処女作「縁」を発表して以来、一八五年になくなるまで、写生文から小説、戯曲、童話、随筆評論など数多くの文学的財産を残している。

弥生子は冷徹な知的観察力の持主であり、各時代の社会状況と人間の間にある冷静に観察し分析し、そして常に問題意識をもって、豊かな教養と広い自由な視野、穏健な倫理性によって、彼女特有な文学世界を作っている。漱石に学んだ写生文のリアリズムを脱し、息子の誕生によって、母親の心理や子供の生態を描いて、大正期デモクラシの下での児童教育の理想を表し、また人肉喰という深刻な問題を扱った『海神丸』、そして昭和初期の社会主義思想と革命運動に強い関心を示し、若い情熱の行方を見極めようと『真知子』や『若い息子』を書く。更に「黒い行列」「迷路」など一連の作品に戦争とファシズムの時代に生きる良心的知識人たちを描いて、作者独自の時代批判の立場を保っている。戦後『秀吉と利休』

のような重厚な長編小説を発表し、秀吉と利休との葛藤を通して、政治と芸術の問題を独創的に展開した。

陳 淑 梅

『真知子』と『若い息子』が誕生した昭和初期は、マルクス主義思想に基づく労働者階級のいろいろな運動と共にプロレタリア文学も隆盛期を迎えており、プロレタリア文学作家は盛んな創作活動を始めた。野上弥生子はプロレタリア作家ではない。しかし、プロレタリア運動に強い関心を持っていた。そして好意的、良心的な態度を取り、彼女特有の冷静な目で観察しながら、当時のプロレタリア作家が飛び超えてしまい、また既成文壇の誰もが描いていないテーマ——革命運動によって影響を受けている中産階級の知識青年とその苦悩を描いた。

『真知子』を創作中の昭和四年十二月十九日の日記に、弥生子はこう書いている。

……自分としては今はこれ以来はかけない。世評はなんと云はうが最上の力を尽くしていると云ふ点で満足が出来る。また現代

の日本に於ては自分の取り扱つてゐる主題は当然書かなければならなかつたものである点に於てもまた。

当時、このように自らプロレタリア文学運動やマルクス主義運動に参加しないが、運動を同情する立場で執筆している作家を同伴者作家と呼んでいた。弥生子はその代表的な作家の一人と見られた。当時、新進の文芸評論家であつた宮本顕治は「同伴者作家」（昭和六年四月「思想」）において、プロレタリア文学の側から、同伴者作家の進歩性を評価しながらも革命運動に参加しないその小市民性と、思想的限界を併せて批判している。このような批判に対して、弥生子は

……自分には彼等のやうな観点からのみは、ものはかけない。もつと自由な見方がし度い。プロレタリア・イデオロギも承認され、その下に行動しようとしてゐる意図も分かる。しかしそのみを描かなければならないとはおもわない。斯く行動するものもあり、行動せざるものもあり、いろいろさまざまな浮動してゐる生活を常に批判しつつ描きたい。虫の良い書き方はし度くない。また都合のよいことのみは見度くない。すべてをあるがままの形象に於て描き度い。長い歴史に於ては、それも一つの貴重な仕事であるとおもつてゐる。（『野上弥生子全集』第2期第2巻日記 2）

と自分の冷靜を保ち、プロレタリア文学作家がほとんど目を向けていない現実、「いろいろさまざまな浮動している生活」の中の真

実を描こうとしたのである。

『真知子』は昭和三年一月から執筆し、昭和五年の十一月まで三年間近くかけて書かれた作品である。中流上層階級出身の若い娘菅根真知子は、自分の保守的な家庭環境に反発して、回りのブルジョア階級の「退屈と醜陋と滑稽」な生活に対する反感を覚え、そこから脱出しようとする。そして学友の大庭米子を通して、革命運動家の関と知り合い、その美貌と思想に引かれ、恋愛関係に陥る。しかし関に愛情を告白して、結婚の決意をし、その結婚をきっかけに革命運動に飛び込もうとする直前、真知子は米子が関の子供を妊娠していることを知り、関に強い怒りを感じ、関とも革命運動とも決別してしまふ。最後には曾て断つていた求婚者、労働者の争議に理解と誠意を示すブルジョア華族河井との結婚を決めるといふのが物語の大筋である。

『真知子』の掲載状況は次の通りである。

「真知子」……………『改造』第10巻第8月号昭和3年8月1日  
 「或るソシヤリスト」……………『改造』第10巻第9月号昭和3年9月1日  
 「旦那様、子供、犬」……………『改造』第11巻第1号等昭和4年1月1日  
 「冷たい露」……………『改造』第11巻第3号昭和4年3月1日  
 「燃ゆる薔薇」……………『改造』第11巻第10号昭和4年10月1日  
 「銀の独楽」……………『改造』第12巻第1号昭和5年1月1日  
 「彼女と春」……………『改造』第12巻第5号昭和5年5月1日  
 「血」……………『中央公論』第45年第12号昭和5年12月1日

上記のとおり、「血」の章だけは『改造』に載っていない。この断絶の理由については、最近刊行された野上弥生子の日記（『野上弥生子全集』第2期第3巻）によって明確になった。

一昨日電話で約束してあつた改造の箕輪氏午食後來訪。執筆中の真知子を今度何月号に発表するやの交渉に対し社の合議によりやめてほしいと云ふ。作品の価値については誰も疑はないし、ケツをつけるものもない。ただあまりだらだらになり反響がなくなつたから掲載し度くないと云ふのである。

腹立たしく口惜し胸いつぱいになつた（中略）突然さういふ無礼なことを云ふべきであらうか。（中略）今度の侮辱がしのびがたくかんじられる。

（結局「血」の章は夫の野上豊一郎の斡旋で『中央公論』に載せてもらった。）弥生子は改造社の態度を無礼だと言つて立腹している。渡辺澄子は弥生子の自分の作品への過信を指摘して「怒りにふるえながら違約への抗議、著者側権利を主張するが強行に中止決定される。しのびがたい屈辱感にうちのめされる」（『作品の虚実』「近代文学研究」5号）と弥生子の「プライド」を強調する。しかしここで『改造』に掲載された「彼女と春」までの七章の内容を注意したい。

真知子は「金と時間の無目的な消費で、ブルジョアに涌いた蛆の生活」に決別しようとしている。ブルジョア華族の温厚な考古学者河井の求婚もはっきりと断る。「自由と権利を奪はれた人達が奪はれたものを取り返さうとして戦つてゐますわ。それぞれ氣に入つた

暮らし方をして、それでだれも虐げない社会を作り出さうとして、首になつたり、豚箱に投げ込まれたり、学校から追ひ出されたりしてますわ。……私の今の気持では、お母様のお鼓のお相手が動まないと同じに、あなたのさう云ふ生活のお相伴をしようとは思ひませんわ」というように、真知子は「求婚の拒絶と云ふより」「一つの宣言」をするのである。

そうして精悍な革命家閨の懐に飛び込もうとする。「河井さんを断つたとき私はあなたを考へてゐたのです。いえ、いつだって、いつだって考へてゐたのです。今の生活から私を救ひ出してくれるのはあなただつてことを。——あなたに依つてだけ、私は生き直れるのだつてことを。——」と告白している。

「彼女は今はじめて幸福であつた。恋の単なる勝利ではなく、牢獄を脱け出た、足の鎖をやつとはづした囚人の満足にそれは似てゐた。」と弥生子は情熱を込めて描写している。

このように「彼女と春」の章は真知子と革命家閨との恋愛の成立で終わる。普通に考えれば、小説のこの後の展開は、真知子は閨と強く結び付き、革命運動に参加し、一人の女性活動家として成長するであろうと予想される。だが、続編を発表した場合の政治的な反響と危険性を考慮して、改造社は「真知子」の続きの掲載を断つたという可能性も考えられる。しかし、弥生子はそういう政治的な配慮は全くしていない様子で、ただ「ジャーナリズムのばつこ」と「傲慢」に怒りを抱いている。

ともかくも『中央公論』に載つた最後の「血」の章は、意外な展開を見せ、急な結末によって物語を終わらせることになった。

真知子は訪れて来た米子から、彼女が閨と既に結婚しており、閨

の子供を妊娠していると聞いて、関に対する怒り、もつと複雑な、分析し得ない痛痕と厭悪に全感覺を掻き乱される。そして関と別れる。間もなくブルジョア華族の河井が労働者に自分の資産を解放したと聞き、その誠実な生き方に感動して、改めてその求愛を受ける決心をするのである。

この急な結末は、前の七章との間の大きな落差のなかにあるものは、やはり当局への政治的な配慮によるものとは思えない。「血」はもともと『真知子』のモチーフであった。

まず「血」の章の構想は改造社の掲載拒絶（昭和五年十月三日）より5カ月前から既に練られている。

昭和五年四月二十八日の次のような日記がある。

午前はこの間からはじめかけた真知子のつづきの書きもの。今度は「血」と云ふ題で書かうとおもふ。筋は頭の中に組み立てられてゐる。如何に表現すべきかが問題である。

更に昭和六年十月一日に『婦人公論』に発表した『真知子』に関する随筆「鳴る浅間山の麓から」（8月に脱稿）ではそのモチーフがはっきり説明されている。

あなた方のやうな地位と生活をしよはされたお嬢さんが（私の作中の女主人公もその一人なのです）今の世の最大な問題、——搾るものと搾られるもの、つねに遊んでゐるものとつねに働いてゐるもの、直接生産に関与することなしにただ利潤のみを享受してゐるものと、直接生産に従事しながら利潤には与らず、而かも

その生産の利潤を増すために強度の労働と貧困を課せられてゐるものとの対立に眼を覚ます時、あなたのやうに苦しみ、その中から如何して通るべきかに迷うのは寧ろ自然すぎるのだと思ひます。（中略）とは云つても、あのママを捨て、あの家からあなた飛び出すこと——さうすることに依つて潔癖に無産者となり、実行運動に投じようとする決心に対しては、私は俄かに賛成できかねます。（中略）その重大な転機に於いてあなたに容易に賛成しえないのは、さうです、あなたを見くびつてゐると云つてもよいのです。いいえ、あなたではない、あなたの血を、あなたの二十五兆の細胞を、それが常に鋭敏に感じてゐる階級的な力を丁度地球が太陽系の力学から脱出しえないと等しい運命的な牽引力を見くびつてゐる。（中略）私の愛するタミをその中で滅したくないからです。（中略）外の戦場に飛び出す前に、あなた自身の内部で戦ふものがある筈だと云ふのです。その間の懷疑や逡巡に対してどこまでも率直であれと望むのです。

これは正に『真知子』という小説のモチーフの告白だと言えるだろう。ここに弥生子の当時の急進的な革命思想への思慮深い批判精神がはっきりと現れている。そして革命運動は「えらばれた革命闘士」によつて行われることで、「あなたやうなお嬢さん」は「自分の力に相応した持ち場で誰にも気づかれぬやうな小さな役割に従事」すればいいという、同伴者文学作家特有の立場が「血」の章で示されたのである。「地球が太陽系の力学から脱出しえない」と同じような強力な「血」の宿命、「生まれながら細胞に浸み込んできた血の引力」を自覚し、「正直に懷疑」することの意義を弥生子

は信じている。

『真知子』のもうひとつのモチーフは当時流行していたコロントアイムズにたいする批判にあると思われる。

コロントアイムズについて、弥生子は初めから疑問をもち、批判的な目で見ていた。『真知子』の執筆をはじめたばかりのころ、弥生子は「コロントアイのソヴィエート・ロシアの婦人の恋」を取り扱ったもの」を読んでゐる。そこには「わりと真情のこもったものであるが、しかし美に対して人間がごとくに女性がもつてゐたこれまでの嘆美意識を斯うまで急に換えうるのが疑問である。この疑問は同時にマルキシズムの美意識——芸術意識に対する疑問だともおもふ。」という日記を書いた。

特に当時の日本での「性行為は一杯の水を飲むに等しい」というようなおかしい形のコロントアイムズの流行を弥生子は許せなかつた。当時のマルクス主義運動の中に現れ始めていた問題、「男性闘士の道具にされたハウスキーパーの問題」(中山和子『昭和文学の陥穽』「男性的偏向の問題」)を見逃さなかつた。

作品中の大庭米子はむしろ一人の忠実なハウスキーパーとして描かれていてと考えていいだろう。亡兄の革命同志関の為に、米子は自分のすべてを献げ、関の子供まで妊娠した。しかし関は言う。「仕事はすべてで、個人は常に無であることを必要とする我々の生活に、最も個人的な恋愛を入れるのはどんな形に於いても無理だ」「厳密に解剖すれば僕の大庭にもつてゐる感情は亡くなつた大庭に對すると大差はないので、はじめからそれを一歩も出なかつた」と。この関の非人間的な発想と卑怯な男性的エゴイズムに對して、弥生子は真知子を通して厳しく批判する。

女が一人で母親になれるとお思ひになるんですか。(中略) あんな方の運動が人間から貧乏をなくすやうに、斯ういふ苦しみをもなくするのでなかつたら、結局何になるんでせう。どんな見事な組織で未来の社会が出来上がらうとも、斯んな思ひで苦しむものが一人でも残つてゐる間は、パンや着物で苦しむ今の世界が不完全だと同じに、決して完全な世界ではない筈です。

本来、プロレタリア文学は男も女も含めた人間を解放する運動である筈だが、人間を解放するために、同じ人間である女を平気で犠牲にする。つまり彼らの考える人間には女が入つてゐると思えない。弥生子は運動批判の目で女の立場から、この革命運動中に存在する「男性優位」の矛盾を指摘せずにはいられなかつたのである。現在の新しいフェミニズムの立場から見ても弥生子のいち早い指摘は極めて重要な価値をもつと言えらるだろう。

『真知子』が発表された当時、大きな反響が起つた。そのユニークな主題、作品に展開されている問題意識が、多くの青年読者を引き付けた。特に知識青年の間で、真知子と同じような悩みをもつ人々の共鳴を引き起こした。しかしこの作品は切実な思想問題を取り扱つてゐるため、発表当時からずつと問題作品として、一定の評価を受けると同時にに厳しい批判を浴びてゐた。

『真知子』の問題点として、宮本百合子や、平野謙、渡辺澄子などの論をまとめてみると次のように考えられる。  
まず真知子という主人公の描かれ方に問題があるだろう。平野謙

が指摘したように真知子は革命と恋愛を等価に、或は無差別にとらえる。恋愛をもって、革命運動へ架橋しようとする。その思想と恋愛の短絡的な考え方、生き方を作者自身が無批判に描いている。関の思想に真知子が引かれたのだと作者は再三強調する。しかし革命家として設定している関は社会的な場面に姿を現したり、婦人とのいきさつの場で登場したりするほか、革命家にふさわしい活動が何ひとつ描かれていないばかりか、関の美貌と精神が必要以上に強調されるため、真知子が一体関の何に引かれたかを疑いたくなる。したがって関と米子との関係を知り、関と別れることを心に決めて、「はじめから愛してたんじゃないのかもしれないわ、——多分。愛したとすればあの人じゃなく、あの人たちの考え方だったのよ」という真知子のセリフも嘘っぽく聞こえるし、真知子の知的虚栄心とも受けられるのである。関と別れてから、あれほど軽蔑し批判していた河井に愛を感じ、結婚を決めるといふ内部の必然性が描かれていない。

関のような男だけをマルクス主義者の代表、典型とする描き方は、宮本百合子をはじめ左翼陣営の批判のとおりであり、関が多少劇面化されたのも欠点であるが、しかしそれだけに弥生子の批判は激しかったのである。

河井の描写が非常に表層的で、内面にほとんど触れられず、河井の行動は読者に納得しにくい。特に指摘したいのは、結末に研究所以外の全財産を投げ出し、会社を職工たちの共同管理に任せるといふ設定である。これは有島武郎の農場解放から影響を受けていると考えられる。しかし工場と農場の機構と経営上の違いを見落としていたため、ありそうもない工場解放の作り話になってしまった。こ

れも野上弥生子の階級的限界、同伴者の限界によって生まれた甘さと言えるだろう。

しかし何と言っても、この作品が取り扱っている主題は、当時の盛んなプロレタリア文学運動の流れの中で飛び越えられ、忘れ去られ、しかし歴史の一面面として反映されなければならぬ主題であった。この意味では、『真知子』という作品は日本近代文学史上のひとつの空白を埋めるといふ役割を果たしたとも言えよう。

作者は真知子を始め何人かの女性の恋愛と結婚生活を通して、封建的な婚姻制度を批判し、女の本当の幸せを追求しようとした。同時にまた、田口一族を中心にブルジョア有閑階級の醜陋な生活を赤裸々に暴露し、弥生子の人道主義思想を一貫させている。そして数多くの登場人物のそれぞれの個性、複雑な人間関係、各人物の地位や性格にふさわしい会話などが円熟した技法で描かれている。『真知子』は弥生子の始めての長編小説として、女性像による近代日本文学の一つの重大なモニュメントを残したのである。

『真知子』を書き上げて、ちょうど二年後に『若い息子』（昭和七年十二月「中央公論」）が『真知子』の言わば男性編として発表された。

『真知子』執筆のときの盛んなプロレタリア運動は、この頃猛烈な弾圧を受け、学生運動も鎮圧されて、全国の大学や高等学校で退学や放校が続出することになった。常に社会的関心と冷徹な目をもって、社会の動向を見詰めている弥生子は、この切実な問題を書かずにはいられなかった。特に弥生子の息子のうえの二人がちやうど高等学校で学んでいる時期で、学生運動に直面しているので、この

テーマは彼女にとって他人事ではなかった。「とにかくこれを書いてしまわなければ、他のどんな仕事も出来ないほどこの一つのテーマは現在の私を捕へてゐる。」と弥生子は『若い息子』を執筆し始めた次の日（昭和六年六月四日）の日記に書いてゐる。しかしあまりにも身近なことを書くことになるので、母親としての弥生子は子供のことを考え、気を揉んでいる。「書きかけのものがまだ本調子に行かず。一つはこれの発表に不安があるからである。モキたちの気もちを損じてまで発表は出来ない。」と日記に書いた。結局「かいたり、けしたり。一步も前進せず」という状態が続き、創作は一週間で中止する。一年程経って昭和七年の五月、ようやく再び執筆が始まったのである。

『若い息子』は、中流階級出身の旧制高校三年の青年工藤圭次が社会主義の研究會（R・S）に入るが、数回の参加の後、メンバーが工場労働者と連係してピラを巻いたため、R・Sの組織が分かり、彼も逮捕される。釈放されてから、高校の処分の厳しさと不公平に怒りを感じ、友人の復校運動の先頭に立って戦おうとする。唯一の息子と二人きり暮らしをしている母は、息子を失いたくないが、息子の真つぐな気持ち、純粹な情熱を損じたくなかった。最後に涙で運動に赴く息子を送るという感動的な話である。

主人公の圭次のモデルについては、弥生子の長男素一を想定し易いが、瀬沼茂樹によると、弥生子も素一も運動に関与しないと否定するという。しかし弥生子の日記を読むと、『真知子』の執筆の時点において、素一氏は運動にかかわっている。また『若い息子』執筆の時点では、運動の渦中にいたのは次男の茂吉だということが分かる。つまり圭次という人物は、長男素一と次男茂吉を合一して作

り上げたものと言える。そして圭次の母親の存在も弥生子自身との関わりが大変多い。『若い息子』という作品と弥生子の日記とを読み合わせると、作中の主人公工藤圭次の背後に、素一と茂吉の二人の影が重なって浮かんで来る。同時に圭次に母親の背後に、弥生子の影も見えてくる。但し、実在人物の素一も茂吉も結局運動に対して「中立的態度を持してゐる」か、「それ以上深入りはし度くない」のであったが、作中の圭次は違っていて、最後に正義感に燃えて、運動には参加する。このように弥生子が現実生活で実現出来なかった、或は自分の息子に実現させようとは思わなかった理想を工藤圭次に託したと言えるだろう。

『若い息子』は『真知子』に比べて、はるかに結晶度の高い魅力ある作品となっている（沢田章子「若い息子解説」新日本文庫）文の構造、人物設定と描写だけではなく、明らかな思想的前進が見られる。『真知子』では一度革命運動に近付いた真知子は、最終的にブルジョア華族の懷に帰る。これに対して圭次は、将来を失うかもしれない困難な危険な、しかし正義の道を選んだ。この思想的飛躍について弥生子は「私はちっとも飛躍なんかしてないのよ。ただ子供たちと一緒に大きくなって、ここまで来たんですよ。私にリアリストとして自分のまわりの眺めつつここまで来たのだ」と宮本百合子との対談でそう述べた。

確かに弥生子が自分自身の『若い息子』の思想と行為を母親らしい愛と信頼から、エゴイズムのに正当化する部分もある。しかし息子が運動を止めた後でも、その行動を理論として成長させた。つまり息子たちの行為に対する理解に止まらず、その行為を普遍化し、

昇華したのである。

『若い息子』は、当時これを発表するというだけで危険を冒すかも知れぬ厳しい時代の中で、多くの伏せ字のまま発表されており、社会に対して大きな抵抗を示していた。

弥生子はこの作品の後で「反戦」へとテーマを移行し、「哀しき少年」や『迷路』へと作品を展開して行く。

このように弥生子は、常に問題意識をもって、自己の問題、そして社会の問題を永遠に誠実に真摯に追及し、良心的に作品を創作して来た。

### 参考文献

- 渡辺澄子『野上弥生子研究』八木書店（昭和四四年一二月）  
瀬沼茂樹『野上弥生子の世界』岩波書店（昭和五九年一月）  
助川徳是『野上弥生子と大正期教養派』桜楓社（昭和五九年一月）  
渡辺澄子『野上弥生子の文学』桜楓社（昭和五九年五月）  
中山和子『昭和文学の陥穽』武蔵野書房（昭和六三年七月）  
瀬沼茂樹『新しき生命』解説 角川文庫（昭和二九年一〇月）  
荒 正人『仲子と真知子』（市民文学論）青木書店昭和三〇年六月）  
平野 謙『日本現代文学全集63 野上弥生子宮本百合子集』解説 講談社（昭和四〇年二月）  
沢田章子『若い息子』解説 新日本文庫昭和五三年一月  
宮本百合子「二つの頁の上に——昭和初期の婦人作家——」（『文芸』昭和四五年三月）  
中西芳絵『真知子』試論——モチーフの成立と展開——」（『文芸と批評』五一—七 昭和五七年七月）

渡辺澄子「作品の虚実——野上弥生子の『同伴者』再検討——」（『近代文学研究』五号 昭和六三年八月）

（チン シュウメイ、明治大学大学院博士後期課程在学）